

笹村草家人 年譜

SASAMURA Sokajin

1908年（明治41）

2月11日、東京市芝区神明町21番地に、父・鎌熊（かねくま）、母・てるの長男（3男1女）として生まれる。本名・良紀（よしのり、紀元節に由来）。父は木彫、西洋画を志した末、図画印刷会社に勤務し、そのかたわら良水と号し短歌に専念した。祖父・良昌（よしまさ）は、土佐藩の藩医、また和歌を嗜む。

1914年（大正3）6才

4月、神明小学校に入る。少年の頃は動物、田園、絵を描くことの三つを好む。また大勢と交わることを好まなかった。祖母が肺尖カタルに罹り、両親とともに翌春より岡田虎二郎の静坐に参じる。

1917年（大正6）9才

7月、渋谷町中渋谷に移る。渋谷小学校入学。

1920年（大正9）12才

4月、日本中学校入学。翌年、猪狩史山の授業を初めて受ける。その後、東洋史、日本史を教わる。とくに愛国心、国体観、国士の風格について解するところがあった。

1925年（大正14）17才

3月、日本中学校卒業。外国語学校蒙古語科を受験したが不合格。この頃から、美術、文芸に興味を持ち、高村光太郎の『ロダンの言葉』を読み彫刻に志向する。秋より同舟舎（創立は明治37年であるが長く中断し大正14年9月に再開。指導者・小林萬吾）に入り素描を勉強する。

1927年（昭和2）19才

東京美術学校彫刻科本科塑造部に入る。当時の教授は朝倉文夫、建畠大夢、北村西望で、彼等の影響を受けた学生が多かったが、その傾向に辟易し、また帝展の彫刻を見ては「我が為さんとするところはこれに非ず」と思う。

1931年（昭和6）23才

春、京都の和辻哲郎を訪ね教示を受ける。以後民族学に興味を持ち柳田國男に傾倒する。東京滞在中のイサム・ノグチを訪ねる。京都で和辻、ノグチに会う。奈良の古仏をノグチと見る。9月、再興日本美術院第18回展覧会をノグチと共に見る。

1932年（昭和7）24才

東京美術学校卒業制作として《着衣少女立像》（乾燥塑像）を造る。第7回国画会展に《塑土坐像》が初入選する。7月から8月にかけて《父の首》を制作する。山内壯夫を知る。柳田國男に会う。

1933年（昭和8）25才

この年から、目黒の陶芸家安原喜明のもとに3年間通いテラコッタの研究をする。《安原君の首》を制作する。

1934年（昭和9）26才

2月から4月にかけて《猪狩史山先生の像》を制作する。第9回国画会展に《猪狩史山先生の像》を出品し国画会奨学賞を受け、会友に推挙される。

1935年（昭和10）27才

国画会彫刻部はブールデル風が横溢し、高村光太郎が出品しないためつまらなく感じ、会を去る。この頃から草家人（そうかじん）の号を使う（「自ら草家に住む人となって生活を根本から創造するほど興味深いことはなかったことから」）。近所の火事で家が類焼する。蔵書が焼けたのを機会に翻訳書を求めることと語学を捨てる。越谷農事試験場で働くが運動性肋膜炎となる。初夏、春陽会での石井鶴三の講演を聞く。秋、鶴三を訪ね師事する。夏、下宿の大家をモデルに《染谷メ太郎老の首》、秋、農事試験場の保証人の祖母をモデルに《中尾刀自の首》を制作した際、モデルが底光りする不思議な体験を初めてする。この頃、長野英夫を知る。

1936年（昭和11）28才

4月から、日本中学校に勤める。9月、再興日本美術院第23回展覧会（以後、院展と略す）に良紀の名で《作男の首》を初出品する。父親が亡くった一週間後に肋膜炎にかかり重体となる。

1937年（昭和12）29才

1月、杉本慶子と結婚し下高井戸に移る。夏、京都知恩院で津田寿一をモデルに制作する。この時再度モデルが底光りする体験をし、その貴重な根源の姿が見えた経験を後年「底光りする世界」としてまとめる（1952年）。長女・茉莉生まれる。

1938年（昭和13）30才

島崎藤村を訪ねる。島崎邸で山崎斌と出会う。第25回院展に《津田非仏居士》を出品、この回から草家人の号で出品する。

1939年（昭和14）31才

上北沢に移る。

1940年（昭和15）32才

秋、日本中学校を辞する。『篤農』に随筆を書く。《岡三保子刀自》を制作する。『心の声』の編集に携わり「良水歌集研究」を12回連載する。次女・睦子生まれる。

1941年（昭和16）33才

第28回院展に《岡三保子刀自》を出品する。

1942年（昭和17）34才

《坐女》を制作する。この頃、淀井敏夫、古藤正雄を知る。農家暦研究を通して山口民蔵を知る。『思想』（7月号）に「十六の断章」を載せる。

1943年（昭和18）35才

9月、第30回院展に《坐女》を出品し、院友に推挙される。《母子像試作（その一）》を制作する。『月明』第6巻第10号に「藤村像のことなど」を載せる。三女・小衣生まれる。

1944年（昭和19）36才

3月教育召集を受け入隊、臨時召集に切り替えられ出征が決まり死を覚悟するが、東京美術学校彫刻科助教授として呼ばれ、召集は6月解除される。

7月、長女を集団疎開させるか家族で疎開するかと迫られ、家族での疎開を決める。8月、山梨県桐原（ゆずりはら）に疎開、終の棲家となる。

1945年（昭和20）37才

3月、再召集を受ける。武州松山の整備中の秘匿飛行場中隊の暗号手となる。

1946年（昭和21）38才

7月から11月まで山口民蔵をモデルに制作する。翌年9月、第32回院展に《畏友山口民蔵像》を出品する。

1948年（昭和23）40才

渋沢敬三と出会う。6月、石井鶴三と高村光太郎を岩手の太田村に訪ねる。渋沢邸の篤農家の集まりで石黒忠篤に出会う。イサム・ノグチと再会する。

《母子像試作（その二）》を制作する。四女・穂摘生まれる。

1949年（昭和24）41才

石井鶴三が藤村像を制作するための段取り役として、木曾に滞在する。《鈴木迪三氏像》を制作する。

1950年（昭和25）42才

9月、第35回院展に《母子像試作（その二）》《鈴木迪三先生》を出品、《鈴木迪三先生》が院賞の白寿賞を受ける。《裸者の首》を制作する。

『信濃教育』第765号に「石井鶴三の藤村木彫」、第767号に「荻原碌山」を載せる。『木曾教育』創刊号から「石井先生語録」を連載する。五女・小草生まれる。

1951年（昭和26）43才

『信濃教育』第772号に「迫りくる彫刻のむつかしさ」、第773号に「荻原守衛に関する手紙」を掲載する。信州上水内教育会で講演をする。

《母子像試作（その三）》を制作するが完成しなかった。第36回院展に《裸者の首》を出品（無鑑査）する。12月から《激怒せる天使》の制作を始める。

『信濃教育』第773号に「荻原守衛に関するヲルター・バックの手紙」（訳）を載せる。『木曾教育』第2号に「石井鶴三論覚書」を載せる。

1952年（昭和27）44才

9月、第37回院展に《福音—激怒せる天使（エチュード）》を出品し院賞の大観賞を受ける。9月より石井鶴三に付いて法隆寺金堂再建のための雲斗雲肘木の制作

進行役として携わる。『信濃教育』第781号に「底光りする世界」、第783号に「鬼才武井斌」を載せる。『木曾教育』第4号に「木彫島崎藤村先生像」を、第5号に「師父傳（一）」を載せる。母・てる没する。

1953年（昭和28）45才

長野県南安曇教育会から荻原碌山研究委員会の指導を依頼される。9月、第38回院展に《チュニア》を出品し次年無鑑査となる。《痩せた女》を芸大火傷者学生救援展に出品する。

《トルソ習作》を制作する。『信濃教育』第804号に「碌山の彫刻作品について」を載せる。『コスモス』6月号に「虚の線」を載せる。

1954年（昭和29）46才

『彫刻家 荻原碌山』の編集・刊行の主となり尽力する。新宿中村屋で行われた「碌山を偲ぶ会」の発起人となる。日本美術院彫刻部の同人推挙問題から美術院を去る。

『信濃教育』第810号から「現代の彫刻」と題する作品解説を連載する。長男・聡太夫生まれる。

1955年（昭和30）47才

5月から10月まで《胴体》の制作に専念する。『信濃教育』第817号に「碌山論攷（ろんこう）」、第821号に「碌山とその系統」を載せる。

1956年（昭和31）48才

7月から暮れまで《人体立像》を制作する。《腰かけたトルソ》を制作する。

『坂本繁二郎文集』の編集に携わる。

1957年（昭和32）49才

《農婦試作》、《睦子の首》、《ハンドル》（碌山美術館入り口大扉のノブ）を制作する。

碌山美術館の建設推進に尽力する。『信濃教育』第845号から「ロダンを見直す」と題して作品解説を連載し、第847号に「碌山と現代の諸問題」を載せる。

1958年（昭和33）50才

《満州殉難者記念像試作》を制作する。8月、『笹村草家人彫刻作品集』を出版する。中央公論画廊で「笹村草家人彫刻展」（9/8～9/13）を開く。『明月』第21巻1号に「碌山美術館の職人芸」を載せる。『信濃教育』第858号に「碌山美術館」を、第864号に荻原守衛作《女の胴》、第866号に戸張孤雁作《足芸》の作品解説を載せる。『北安曇教育』に「碌山の彫刻と人柄」を載せる。碌山美術館開館。財団法人碌山美術館の理事となる。

1959年（昭和34）51才

東京芸術大学美術部彫刻科石井教室が、石井鶴三の定年退官により閉じられたため休職する。《遠山元一先生》、《川口五男人氏》、《田中徳松氏像》を制作する。

1960年（昭和35）52才

《蛇ぬけの碑》、《灯をかかげる女》、《津田左右吉先生米寿像》を制作する。「碌山の覚醒」を南安曇教育会から出す。

1961年（昭和36）53才

琉球大学に招聘され1月から3月まで滞在し講義をする。滞在中に《沖縄の老女》、《沖縄舞踊家の首》を制作、また博物館の石像獅子像を修復する。《中島茂五郎君》、《河童像》を制作する。休職を止め、東京芸術大学助教授を辞職する。中央公論画廊で「第2回笹村草家人彫刻展」（11/13～11/18）を開く。『笹村草家人彫刻作品集 改訂』を出版する。日本美術院彫塑部解散。

1962年（昭和37）54才

《羽生君母堂古刹像》を制作する。『民間伝承』第257号に「八女の石人石馬」を載せる。

1963年（昭和38）55才

《山口延勝翁観魚像》、《光岑農子の首》、《最後の渋沢敬三先生》を制作する。

1964年（昭和39）56才

《農村句人坐像》、《オリンピック競歩記念碑》を制作する。

1965年（昭和40）57才

3か月にわたり欧州旅行をする。

1966年（昭和41）58才

東京日暮里本行寺の東京静坐会に参加する。《明治天皇像》の制作を開始する。『津田左右吉全集』第5巻付録に「晩年の先生に接して」を載せる。

1968年（昭和43）60才

《明治天皇像》完成する。
『相馬愛蔵 黒光の歩み』に「相馬黒光と坐」、「中村屋の美術裏話」を載せる。

1969年（昭和44）61才

夏、柳瀬有禅老師を通して面識を得ていた加藤耕山老師像を試作する。

1970年（昭和45）62才

《加藤耕山老師頭部》を試作する。《騎馬戦石像》を制作する。加藤耕山老師から竹影徹心居士名を授かる。

1971年（昭和46）63才

《加藤耕山老師像》、《山田玉田老師坐像》、《木曾山神像》を完成する。

1972年（昭和47）64才

東京都西六郷安養寺の仏像を修復する。『禅』1月号から12月号に「わが僧侶像巡礼」を載せる。『高村光太郎の人間と芸術』に「碌山と光太郎」を載せる。『寂室抄』を大智禅寺より出す。10月19日から21日にNHK第1ラジオの『人生読本』で、「人の顔」と題して話をする。

1973年（昭和48）65才

大智禅寺開山《大観禅師像》を完成する。《原敬吾氏像（月の人）》を制作する。『笹村草家人彫刻作品集 第3版』を出す。『中原悌二郎彫刻作品集』に、「中原悌二郎の彫刻」を載せる。6月、蒙古に旅行する。
石井鶴三没する。

1975年（昭和50）67才

6月、インドに旅行する。長野英夫らの勧めで第18回新協美術展（9/15～9/26）に《月の人》《最後の渋沢敬三先生》を出品する。
9月26日、脳血栓で桐原尾続（おずく）の自宅で急逝する。